

# 殘花聚園 (五)

(日本幼兒教育史資料)

東京女子高等師範學校教授

石川 謙

こゝに紹介して見ようと思ふ資料もまた、曾て引用したこゝのある『小兒養育氣質』から採つて來たものである。この書の「卷之五」第一に「壬生の戻りにひつかぶつた猿の面から初まるいさかひ」を題する咄が載つてゐて、その附録に「世に珍らしい布袋親父ほいおぢが能う名の通りし端午のこさぶき」をいふ小話が添えられてゐる。附録の、この小話がこゝで紹介しようとする當の資料である。

子供の生活の、大人のそれと全く異つた性質のものであることに目を着けて、子供だけに見られる特質の漸次的な發達を、兎にも角にも描いてゐるところに、この資料の特色がある。話の主人公は、京都姉が小路通りの或る町に住んでゐる隠居の布袋屋徳右衛門といふことになつてゐる。彼は、「二十五になる徳兵衛といふ息子に嫁を取り、家内睦じう。徳右衛門内儀も姑顔もせず嫁をいたはりし故、嫁も息子も兩親へ孝行盡して暮し」てゐたといふ幸福な生活

者であつた。原文は次のやうに書き出されてゐる。

「此町内に布袋屋徳右衛門とて、有徳なる作酒屋ありけるが。……徳右衛門若い時より生得幼子供を好き。我息子は行儀能ふ養育上そだてあげて今隠居同前の身なる故。別して近頃は他人の愛らしき小兒を集めて悦ばれしが。腹の大きな大の男の髭親父なれき。三つ四つより七つ八つ迄の子供が毎日遊びに來り。叔父様は内にかへき、一度に十人ばかり手を引合て尋たづねに來るこ、寒氣もいさわす大きなからだをよここ、火燵こたつより出、髭だらけな顔をにたたく笑ふて舌を出し、坊主も來たか、サア皆あがれ。叔父も遊ばさ云ふて、火燵のぐるりに子供を並べ置、毒にならぬ菓子なき不斷取置て、銘々に取らせて悦びけるが、ぐわんぜんなき無我な小兒の遊びは、いか様邪氣よきたのしのなげ能樂よきたのしみ。此徳右衛門が好なるもこゝはりなり。」

徳右衛門は、小供の無邪氣な様子を喜んで、五人十人

隣近所の子供を集めて、自分の家を子供宿のやうに提供してゐた。「坊ぎも来たかサア皆あがれ、叔父もあそぼ」といつた分け隔てのない態度で、いつも子供の中に融け込んでゐた徳右衛門であつた。原文は前を承けて直ちに續いて次のやうに展開して行く。

「只折には、利の丸もつとも面白おもしろひ事をいふ物なるは、たんとすの前に徳右衛門の印籠いんろう出てありしが、四つになる坊主の子が走り行て是を取、徳右衛門前へ持來りて悦びし故、めつたに明ぬ物ちや藥がこぼれるさいへば、見るのは大事ないか」と云ひさま、彼印籠を我耳の傍はたはにてしやんくふり、丸藥ぐわんやくのごじやく、鳴音なるおとを聞て、御火消ごひけしの持て行かしやるはしごじやくさいふのもの、氣を付て見れば心ある事。火燧ひたつのはたにぬぎ捨てありしほうろく頭巾あたまを、三つになる子が取て徳右衛門の脊せなへのぼり付天窓あまなまに著せ、大ごさんじやくくく手をたゝいて悦び、くの字を得いはぬ舌のまはらぬ愛らしさ、はしりごゝして椽先へ出るか、障子に穴明て覗くもあり。六つになるわんぱく者がからくりの口上いふさ、七つになる子がさんぽがへり、餘念のない小兒の遊びを見て、芝居しばも花見はなみも思ふて老おひの慰なぐささする雅人がじん」

氣を付けて眺めて見るさ、三歳の子供には三歳らしい思ひ付きもあり言葉遣ひ舌廻りがあるし、四歳の子供には四

歳らしいいじゞさ想像力さうざうりきが現はれてゐる。六つになる子のからくりの口上を真似るのも、模倣盛りの六つらしい特徴があり、七つの子が蜻蛉返りの冒險な遊びを好む所も、活動盛りの七つらしい面影が描かれてゐる。三歳から七歳に至るまでの子供の、それぞれの年齢に伴ふ言葉つき、身振り、心の働きを特徴をよくも捉へて具體的に描寫したものである。

知れば知る程、憎めなくなり可愛らしく思へて來るのは子供である。徳右衛門も今は、世の中一杯に張りめぐらされてゐる儀禮の堰を斷ち切つて子供に目のない好々爺になり切つて「幼き子供ささへいへば乞食の子でも可愛がる生得なま」さまでなつた。「近所より此の徳右衛門を布袋親父ぼくろおやぢくく異名付て、近頃頃は是が通り名の様になつてしまつたのも故なしさしない。

「扱其年も暮れ明る年五月の事なりしが、……目出度節めでたいせつ句の前日、酒事に心を和しけるが、常だに子供の多く來る内、けふは朝より止事なくかわるく幼子いさげな供たへざりしが、一組五六人男の子供見物に來りしは、いづれも分相應我内人形かざり有子供の中に、一人貧しき職人の子ありけるが、此親近年不仕合故節せつきくくの工面くめん悪敷で、端午の祝ひに粽も得まかず、人形は勿論七つ道具の粗末なるも得調へず、漸古き蓑しんこ蒲よもぎ太刀一腰此五つにな

る子に持せ置しが、是をさしてうれしがり、町内子供の所へ行て色々人形を見、此布袋親父殿所へ来てもここにこ笑ふて見物し、たれの所にもかれの所にも能人形がある、こゝの人形も能のがたんさならべてある。ア、わしも此様な人形が一つほしひ、けふは飾つてあるによつてなるまひが、跡で比内の大きなを一つおくれゑさいふて歸りしが……」

親の不如意を知りもし諦めもして、他人を羨ましがつたり身を啣かちたりこそしないが、節句に飾る人形の、欲しいに變りのない子供の人情であつた。この人情をすなほに言葉に現はして、節句が過ぎたら一つだけ貰へないものかき切り出した貧しい子の聲は、徳右衛門の耳にはさながら神の御聲のやうに響いた。物乞ふ子供の聲ながら、さもしさもなければいらだたしさの響も宿してゐない。自然の氣持が自然に囁きを叫いてゐるばかりである。だからそこには、哀れさがない。優しいながらも凜然として權威に似たものを奥底深くに潜めてゐた。「否こは言はせぬ」こいつたやうな窮屈な權威ではなく、「どうしても、さうして遣りたい」念に駆り立てる權威であつた。

「布袋親父彼小兒の歸りし跡にてつくぐ、思ひしは、叔もふびんな事をいひしかな。彼親も職をいこなむ筋目の知れたいやしからぬ者。近所不仕合ゆへ、五節句まで

心よふ暮さず人形なごはないはず、幼心にも得心をして古ひ葛蒲太刀一本で足りては居たれご、そここゝで人形を見てより、けなりふ思ひア、わしもほしむ、跡で一つくれごかいつまんだ様にいふた一言、さりごは無我でごふもいへぬ所、小兒の直すはこゝの事、ほしむご思ふた心のありたけ只一句で聞せし所は、鬼神をも和らげる三十一もじ、さんご和歌にも感通さす道理、面白ひくごひさり悦び感じて、息子徳兵衛ごも相談し、家來一人つれて四條邊の人形屋へ行、義經の人形に旗持の添たるご、辨慶の七つ道具さしたる人形ごを、金五兩三步で調べ、下男に荷なはせいそくして歸り、宿へ戻らず直に町内の彼小兒が所へ持行……」

徳右衛門は流石によく子供の精神生活を理解して、その尊ぶべき所を尊んだ。「さりごは無我でさうもいへぬ所」に感動して、「小兒のすなほ」を、權威さしてさへ感じた。早速「人形屋へ行、義經の人形に旗持の添たるご、辨慶の七つ道具さしたる人形」ごを買求めて、宿へ歸らずその足で、子供の家へ届けてやつた。金五兩三步（現今の金の直段にして金三百四十五圓なる）の人形を饋るごいふのは餘りに突飛に相違ないが、徳右衛門の感動振りを數字の上に誇張したご、取つて取れぬごごはあるまい。

「坊よこゝへこいご呼でさらしければ、爺様人形をもら

ふたき、二親をよばりて悦よろこべごも、節句前の工面あしき所へ思ひがけない處へ、有徳者の所持すべき結構なる人形をくれられければ、嬉うれしいやら難儀なげなやら、ほんの小家に人形の過た當惑、此人形代を半分生しょうで被下たらば、けふ節季の能勝手よにならふ物をこ、思ふ夫婦がそぶりを早さいりしは、布袋親父の老功にて見て取、いか様是は子供不便に思ふた斗誠とせに不便べんと思ふときは、人形よりは内の勝手てなる事をしてやるが近道ちかみちき、氣が付きしゆへ、まよ一向はづすつゝでさふさした拍子しにのり、又懷中より金拾兩取出してさらされしが、是にて誠まことに人形の忝かたじけない一禮を夫婦がさかさまに成ていへば、彼五つになる坊主は家内をかけ廻りて、義經じや辨慶じやさいふて悦よろこびいさむ所は、昔名人の俳諧師が歌仙の付合に酒を飲で、人に物やる面白さういはれたごごく、此布袋親父の物數奇もおろかな様なれなぎ、有徳なまよに息をたかぶり、妾めかけに我身をいたわり、遊所ぐるひに若い時より不養生する人から見ては、貧者の助にもなる風流な樂にて、何失のない小兒の教おしこもなる物數奇かな。」

徳右衛門の感動が——さうして其の無闇に直情的な行動が、こゝでも再び常識はづれに成つてしまつてゐた。親たるものゝ事情に委細構はず、桁をはづれた高價の人形を饋つたことは、子供を喜ばせた度合以上に、親を當惑させて

しまつた。こ、氣が付いた徳右衛門は、子供の喜びをほんまの喜びにしてやる爲めに、その親をも教はねばならぬ羽目うになつた。子供を幸福にするには、如何なる高價な贈り物よりも、先づその親たるものの家庭生活を幸福にしてやらねばならぬこ結んだところに、汲めきも盡きぬ滋味があり示唆がある。  
(昭和十四年四月二十一日稿)

(五五頁より)

「ちきに又拵へてあげるよ。お前が歸つて來るのがわからなかつたからな。さあ、降りて來て乳をお飲み」  
おぢいさんは下から答へた。

ハイディは降りて來て、もこのまゝのあのなつかしい高い腰掛にかけて、お椀を取り上げ、ごく／＼のきを喝らして、如何にもおいしさうにお乳を飲んだ。

「ああおいしかつた！、おぢいさん、うちのお乳は世界中で一等おいしいわね」